《参考資料 ②》　　「道史の構成」に関する検討概要

■趣旨

道史の骨格を定める「道史編さん大綱」（素案）の作成にあたっては、今年６月から10月まで３回にわたって開催した「道史編さんに関する有識者懇談会」（以下「有識者懇談会」という。）での検討が基本になっています。有識者懇談会では様々なご意見をいただきましたが、「道史編さん大綱」自体は事業の骨格にすぎないため、全てを盛り込むことはできません。

最も時間をかけて検討された「道史の構成」についても、「道史編さん大綱」（素案）では「第二次世界大戦後を主たる対象とする現代史（資料編３巻、通史編１巻又は２巻）を中心として、先史時代以後の歴史について叙述する概説のほか、年表により構成される」という簡易な表現となっています。

そこで、有識者懇談会で検討の中心となった「道史の構成」に関して、検討の経緯や道としての考え方を、以下に補足してご説明します。

■対象時期の検討

一般に、２度目以降の自治体史編さんでは、前回で扱った年代から後の時代を対象とする続編の場合と、先史時代から改めて書き直す場合とに分かれます。1981（昭和56）年に編さんを終了した前回の『新北海道史』は、1970（昭和45）年頃までが対象となっています。そのため道では、道議会でのご議論を踏まえ、『新北海道史』の後継史として当初は1970年以降を対象とすることを想定していましたが、有識者懇談会では、対象とすべき時期から検討を始めました。

『新北海道史』の編さんが終了してから、既に36年が経過しています。資料の新発見等により歴史の叙述が時代の変化とともに徐々に古びてくるのは避けられないところであり、有識者懇談会でも、「戦後、あるいは1970年以降だけではなく、それ以前の北海道の歴史をもう一度捉え直すことを含まざるを得ない」とのご意見がありました。

さらに、『新北海道史』の1945年以降の叙述に関しては、「非常に不十分な段階なので、極端にいうと戦後は北海道史はなかったといってもよい」とのご意見もありました。『新北海道史』の戦後の巻は、「歴史というよりは今後の修史事業として、重要な史料をできるだけもれなく年代順に、部門別に整理した」と編者自らが例言で述べているとおり、当時はまだ直近の時代であった戦後について、歴史として叙述する方法を見い出し難かったと推察されます。また、『新北海道史』が明治・大正期の開拓に重点が置かれていたのに対し、「ここ数十年、道民が経験した様々な出来事に重点を置いていくことも大事」というご意見もありました。

こうした有識者からのご意見と、一方で道史を全面的に書き改めるとなると、相当な年月（『新北海道史』の場合、18年）と経費を要するといった道側の事情も併せ、さらに検討した結果、「戦後の現代史の編さんを中心とするとともに、先史時代からの研究成果の蓄積は、別に編さんする概説に盛り込む」こととする旨、有識者懇談会で取りまとめられまし

た。

なお、終戦の年である1945年は、時代の区切りとして一般に認識されていることは確かですが、歴史上の事象は連続するものであり、全ての事柄を戦後で一律に区切ることは適切とはいえないことから、事象によっては戦前・戦中から叙述し、その源流や長期の動向を示すことを想定しています。

■資料編の重視

都道府県や政令指定都市など、比較的大きな自治体がつくる自治体史は、歴史を年代順に叙述する通史編と、通史編の根拠となる資料を解説つきで提供する資料編とからなる場合がほとんどです。近年はこのうち資料編を重視する傾向が強くなっており、資料編を通史編の数倍規模の巻数で作ったり、中には通史編を作らずに資料編のみとする県もあります。掲載される資料も１巻あたり数百点にのぼります。

資料編は通史編のように時代の経過とともに古くなることがなく、次の編さんや他の論考にも生かすことができ、また資料編のための調査自体が、新たな歴史資料の発掘や恒久的な保存に直接的な効果があります。かつては通史編の添え物と見られがちであった資料編ですが、その時々の解釈に左右されない歴史資料への認識の変化が、資料編重視の背景にあります。今回の編さんの中心となる現代史の資料は膨大にありますが、その中から残すべきものを確実に残して後世に伝えることは、今の時代にしかできない作業といえます。

前回の『新北海道史』では、全９巻のうち３巻が資料編でしたが、うち１巻は年表と統計・索引の巻でしたし、残る２巻に収録された資料数も、大部の資料をそのまま収録する形でした。道史として初めて資料編を重視する今回の編さんでは、広汎な資料調査をもとに、例えば「政治・行政編」「産業・経済編」「社会・教育・文化編」の分野別３巻を作成し、それをもとに実証的な通史編を作成する予定です。

■概説と年表の作成

上述したように、今回の道史は戦後の現代史を中心とする一方、別に先史時代からを対象に概説を編さんし、『新北海道史』以降に進んだ研究成果を盛り込むこととしています。

概説はこれまでの道史でも編さんされてきましたが、有識者懇談会では、「これまでの道史の概説は、通史の単なる要約に留まっているように見えるが、今回は内容的に意味のある概説に取り組むべき」とのご意見がありました。理解しやすい内容構成に留意し、平易ながら水準が高く、充実した概説を作成することが求められています。有識者懇談会では、難しい作業ながら、新たな視点で描かれる概説に期待する声が多く寄せられました。

また、今回の編さんでは、年表も併せて編さんします。前回の『新北海道史』には、古代から 1970年までの年表が収録されていましたが、これを刊行年の直前まで補訂して刊行する予定です。